HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小特集序文 ： なつかしい未来へ～福島の再生と科学技術コミュニケーション～
Author(s)	川本, 思心
Citation	科学技術コミュニケーション, 17, 77-78
Issue Date	2015-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59582
Type	other
File Information	web_Costep17_6.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

小　特　集
シンポジウム
なつかしい未来へ
～福島の再生と科学技術コミュニケーション～

東日本大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所事故から約4年後の2015年3月7日，北海道大学CoSTEP主催のシンポジウム「なつかしい未来へ～福島の再生と科学技術コミュニケーション」が開かれた．この小特集は，シンポジウム登壇者3氏の講演と，司会者を加えたパネルディスカッションを収録したものである．

登壇者はいずれも福島の問題に携わっている，映画監督の久保田直氏，農業・食品産業技術総合研究機構の信濃卓郎氏，NPO法人元気になろう福島の本田紀生氏の3氏である．4年が経って事故の印象が風化する一方，福島には未だ問題が山積し，「再生」には程遠い現状がある．異なる立場と専門性をもつ3氏は，福島の現状とどのように向き合っているのだろうか．

久保田氏は，震災と原発事故が起きた直後から，この出来事はあっという間に風化していくのではないかと直感したという．映画を作ることでこのような現実があったことを人々の記憶にとどめつつ，福島の風景に家族の再生という普遍的なメッセージを込めた，と話した．信濃氏は，事故以前は放射能が飛び散る事態を想定していなかったため，研究データは少なかった，と語った．そのような中で，氏をはじめとした多くの研究者が放射性物質の除去や作物への移行を防ぐための研究を積み重ねてきた．本田氏は「福島県民の心は折れかかっている」と深刻な現状を訴えながらも，営農コミュニティ作りやIT・ロボット農業の可能性など，未来への展望を示してくれた．

震災後，科学者に対する信頼は低下し（科学技術・学術政策研究所 2011），科学技術コミュニケーションに対しても「役に立たない」という批判の声が向けられ，そのあり方が問い直された（科学技術振興機構 2013）．シンポジウム後半のパネルディスカッションでは，福島の被災者の目に科学者の姿がどのように映っているかについても，現地取材の映像を交えて登壇者に語って頂いた．

科学技術コミュニケーションに携わる者としては，こうした批判に対して真摯に反省しつつ，クライシス状況下とは異なる今こそ，各自がその分野や特性において何ができるのかを省みなければならないだろう．3氏の活動と福島の現状の一端を紹介する本小特集がその一助になれば幸いである．

なお，このシンポジウムは，2014年度CoSTEPのリスクコミュニケーション選択実習の一環としても実施された．同実習ではこの他に，第81回サイエンス・カフェ札幌「なつかしい未来へ～映像でみる福島の今」（2月15日），映画『家路』上映会（3月6日），ワークショップ「なつかしい未来へ～考えよう，福島のこれから」（3月8日）を開催した．詳細は本号収録の報告（早岡 他 2015）を参照していただきたい．

文責：川本思心（科学技術コミュニケーション編集委員長）

●文献：

科学技術・学術政策研究所 2011:「科学者や技術者に対する信頼」『科学技術に対する国民意識の変化について』http://www.nistep.go.jp/wp/wp-content/uploads/12gatu-made_shinraido.pdf（2015年6月23日閲覧）.

科学技術振興機構 科学コミュニケーションセンター 2013:『科学技術コミュニケーションの現状と展望に関する意見交換会―科学技術社会論の視覚から―中間とりまとめ報告書』（平成25年7月） http://www.jst.go.jp/csc/pdf/hirakawa_02.pdf（2015年6月23日閲覧）.

早岡英介・郡伸子・藤吉亮子・池田貴子・鳥羽妙・川本思心 2015:「リスクコミュニケーター育成プログラム開発の試み～映像メディアを用いた対話の場構築」『科学技術コミュニケーション』17, 35-55.